原 著

学童期後期の子供に対する父親の養育の行動と意識に影響する要因

Factors influencing fathers' child-rearing behavior and awareness for late school-age children

前 原 敬 子 (Keiko MAEHARA)*¹
齋 藤 ひさ子 (Hisako SAITO)*²

抄 録

目 的

本研究では、学童期後期の子供に対する父親の養育の行動と意識を明らかにし、影響を及ぼす要因を検討する。

方 法

研究協力の得られた小学校、子供会へ質問紙調査を実施し、有効回答の得られた251名を分析対象とした。子供に対する父親の養育を行動と意識から因子分析し、影響する要因を「家族要因」「労働要因」「個人要因」より相関係数を求めて検定した。影響度を明らかにするために相関が確認できた変数を重回帰分析で分析した。

結 果

学童期後期の子供に対する父親の養育の行動と意識は因子分析の結果、行動に第1因子「管理／成熟への要求行動」第2因子「会話／表現行動」が抽出された。意識に第1因子「会話／表現意識」第2因子「管理／成熟への要求意識」が抽出された。行動・意識ともに高い内的整合性が確認できた。父親の養育に影響を与える要因は行動・意識の因子と相関の見られた「個人要因」の性役割観、親役割受容感、「家族要因」の夫婦関係満足であった。子供に対する父親の養育の影響度を明らかにするため、相関の見られた3つの変数を独立変数として重回帰分析を行った。結果、父親の養育の行動と意識に最も影響を与えていた要因は夫婦関係満足であった。

結 論

学童期後期の子供に対する父親の養育行動は、社会規範・基本的生活習慣を守らせるなど統制性の行動をとっており、意識は子供との共作用的な関わり、コミュニケーションなどの応答性を意識していることが認められた。父親の養育の行動と意識に最も影響を与えている要因は夫婦関係満足であり、学童期後期の子供に対する父親の養育は、妻との関係に満足していることが子供への関わりを促していた。これより、家族を含めた支援の必要性が示唆された。

キーワード：父親，養育，学童期後期の子供，父親の役割，親子関係

*¹元佐賀大学大学院医学系研究科修士課程 (Master's Program at the Graduate School of Medicine, Former Saga University)

*²国際医療福祉大学福岡看護学部 (Fukuoka School of Nursing, International University of Health and Welfare)

2014年2月10日受付 2014年8月8日採用

Abstract

Purpose

This study clarifies the structure of fathers' child-rearing behavior and awareness for late school-age children and examines the factors influencing it.

Method

With the consent of the collaborating elementary school, we distributed a questionnaire survey among the students. We obtained valid responses from 251 students and analyzed the data. We performed a factor analysis of fathers' child-rearing techniques from their responses on behavior and awareness. Then we determined the correlation coefficients of the "family factors," "work factors," and "personal factors" and examined the factors that influence fathers' child-rearing behavior and awareness. To determine the degree of this influence, we analyzed the variables in which the correlation was confirmed by a multiple regression analysis.

Results

The factor analysis of the fathers' child-rearing behavior and awareness for late school-age children determined that the first behavior factor is "management: request behavior for maturity" and the second "conversation: behavior of expression." The first awareness factor is "conversation: awareness of expression" and the second "management: awareness on request for maturity". We confirmed that both behavior and awareness have a high internal consistency. The factors that influence fathers' child-rearing behavior and awareness were the sense of the gender role, which is one of the "personal factors" that correlated with both the behavior and awareness factors, acceptance of the parent role, and the satisfaction with the marital relationship, which is one of the "family factors." To determine the level of influence of fathers' child-rearing behavior and awareness, we performed a multiple regression analysis of three variables in which correlations were observed, as independent variables. Results revealed that the factor that the most influential in fathers' child-rearing behavior and awareness was satisfaction with the marital relationship.

Conclusion

The fathers' child-rearing behavior with their late school-age children is the controlling behavior, such as enforcing social norms and basic life style. They are also aware of the responsiveness of communication involving cooperation with children. The factor that influences the fathers' child-rearing behavior and awareness the most was satisfaction with the marital relationship. Thus, the father's satisfaction with the relationship with his wife encouraged his involvement with the late school-age children's upbringing. Thus, the results suggest the need for support, including that of family members.

Keywords: father, child-rearing, late school-age children, father's role, parent-child relationship

1. 緒 言

近年、核家族・女性の就業率の増加、児童虐待などの問題により家庭における父親の役割が再考されている。特に学童期後期は、自我の確立に伴い心理的に親から分離していく前思春期段階であり、親子の関わりの難しい時期とされている。

思春期の子どもにとって両親との関係は重要である。父—息子関係では、息子は同性のモデルとして父親をみて同一視の対象(川崎・神田・川口, 2001, p.74)とし、父—娘関係では、父親を異性モデルとすることによって自分に適した性役割を学習し、理想とする父親イメージを父親の自己への関わり方から規定する(小野寺, 1984, p.295; 西村, 1998, p.701)ことが明らかにされている。実際、父親の養育行動・態度は、同一化と統制性が子どもの自己評価(徳田, 1987, p.12)や、

子どもの精神的健康に影響を与えている(石川, 2003, p.72)ことが確認されている。このように学童期後期は、自身の父親を通して父親像を形成し始める時期であり、父親との関わりが重要な時期であると捉えこの時期の子どもを持つ父親に着目した。

父親を対象とした研究を概観すると、父親の役割を経済的な基盤、母親を支える存在、子どもに価値観を伝えるエージェントとした視点で研究されているものが大半であった。父親は子どもと関わり、妻との相互関係を通じて、親となる意識を発達させている(蛭田・斉藤・木村, 1999, p.438)。親になる喜びが強い男性ほど、育児に積極的に参加していることや、成熟した性格特性を持っている男性ほど、親になる意識を肯定的にとらえている(小野寺・青木・小山, 1998, p.129; 佐々木・植田・鈴木他, 2004, p.149)という報告もあった。また、父親が育児・家事行動をとれるかどうかは、

帰宅時間や父親がもともと持っている性役割観の影響を受けていた(柏木・若松, 1994, p.80)。

Belsky (1984, p.84) の研究では, 親の養育行動に親のパーソナリティ, 子どもの特徴, 社会的要因(夫婦関係・社会的ネットワーク・職業)が直接的に影響することを明らかにしている。Baumrind (1967, pp.80-82) は, 親の養育態度を応答性・統制性の2次元で構成し3つに分類して捉えた。「権威的態度」は, 子どもの自主性と成長に積極的な励ましを行う親, 「権威主義的態度」は孤立しており管理することが多く温かさにかける親, 「許容的態度」は統制性に欠け成長への要求が低い親としている。平田 (2003, p.37) は, 父親の青年への養育行動を「親と子どものコミュニケーション」「親の養育」「親の管理」「成熟への要求」の4次元より構成し調査した。結果, 青年前期(中学生)の子どもを持つ父親には, 関わる行動と意識が内在していることを明らかにしている。したがって, 学童期後期の子どもを持つ父親の関わりにおいても, 父親自身のパーソナリティ, 家族要因, 社会的要因の影響を受け, 子どもへ関わる行動と意識に基づいて養育行動を決定していることが推察される。

本研究では, 学童期後期の子どもに対する父親の養育を行動と意識から明らかにし, 影響する要因を検討した上で, 家庭における父親の役割, 子どもへの養育にどのような支援が必要なのか考える基礎資料とした。

II. 概念的定義

1. 子どもに対する父親の養育

父親の子どもに対する「養育」を, 主として父親の子どもへの関わりとし, 養育には行動と意識を内在しているものとして捉える。子どもの意図・要求に気づき「声をかける」「会話をする」などの言語的なもの, 子どもの意図をできる限り充足させようとする行動「一緒に買い物に行く」「一緒に遊ぶ」等共作用的なものを応答性, および「親の背中を見て育つ」といった態度, 子どもの意思とは関係なく親が子どもにとってよいと思う行為を決定しそれを強制する行動「子どもが悪いことをした時に叱る」「ルールを守らせる」等の管理・統制的なものを統制性, として捉えた。

2. 学童期後期

学童期後期は, 思春期を前にこれまでの親との密接

した関係から, 自立しながら距離をおく関係に入っていく時期であり前思春期と捉え, 小学校4, 5, 6年生とした。

III. 研究方法

1. 調査対象

学童期後期(小学校4, 5, 6年生)の子どもを持つ父親を対象(以下, 対象を父親とする)とした。F県下の小学校4校, 子ども会1団体の父親704名に配布した。回収数は264名(回収率37.5%)で有効回答の得られた251名(有効回答率95.0%)を分析対象とした。

2. 調査期間

2009年7月～10月

3. 調査方法

自己記入式質問紙調査にて実施した。父親への依頼文と質問紙の配布は, 研究協力の上で得られた小学校校長, 子ども会の会長へ依頼し, 父親へ配布してもらった。回収は, 父親各自が任意に投函する郵送法にて行った。

4. 調査枠組み(図1)

先行研究(森下, 2006, p.185)より明らかになった父親の子どもへの養育には, 父親自身の持つ性役割観, 親としての役割受容感, 夫婦関係満足, 父親の労働時間に影響を受けるとしたモデルを基にした。本研究では, 父親の養育には, 行動と意識が内在しており, 養育に影響を与える要因を個人要因, 家族要因, 労働要因として, 父親の子どもへの養育行動と意識に何が影

図1 調査枠組み

響するか検討した。

5. 調査内容

1) 子どもに対する父親の養育の行動と意識を測定する尺度

父親の子どもへの養育の行動と意識を測定するため、平田 (2000, p.297) が作成した父親の青年への関わり行動尺度「会話／表現行動 (8項目)」「管理／成熟への要求行動 (6項目)」の14項目、関わり意識尺度「会話／表現意識 (5項目)」「管理／成熟への要求意識 (5項目)」の10項目を作成者の許可を得て使用した。6段階評定で点数が高いほど、関わる行動・意識が高いことを示す。平田の研究では中学生の父親を対象としているが、本研究の対象である学童期後期の父親においても予備調査が実施され信頼性は得られている。プレテストを実施し内的整合性を確認するために Cronbachの α 係数を測定した。

2) 子どもに対する父親の養育の行動と意識に影響を与える要因

(1) 個人要因

父親の年齢、学歴

性役割観：平等主義的性役割態度スケールの短縮版 (鈴木, 1999, p.40) を作成者の許可を得て使用した。この尺度は否定的な態度を示す11項目と肯定的な態度を示す4項目で構成され、5段階で回答を求めた。逆転項目である11項目の値を逆転させて合計を得点とした。得点が高い程平等主義的な性役割観を持つことを示す。先行研究では Cronbachの α 係数は0.91で、本研究では0.85であった。

親役割受容感：この尺度は大日向 (1989, p.154) の母親役割受容感を一部修正し、母親を親として記載した親役割受容感尺度 (森下, 2006, p.187) を作成者の許可を得て使用した。先行研究では因子分析の結果、「親役割の肯定的態度 (6項目)」と「親役割の否定的態度 (6項目)」の構造が示され、本研究では、肯定的親役割受容感、否定的親役割受容感とした。得点が高い程親役割に対して肯定的、あるいは否定的受容感であることを示す。Cronbachの α 係数は、0.79と0.67であり本研究では0.79と0.69であった。

(2) 家族要因

配偶者の有無、年齢、就労の有無、子どもの人数・学年・性別・出生順位、同居家族の有無 (配偶者及び子ども以外)

夫婦関係満足：夫婦関係満足はノートンが作成し

QMI (Quality Marriage Index) を翻訳した尺度作成者 (諸井, 1997, p.72) の許可を得て使用した。この尺度は夫婦関係の満足を示す6項目を4段階で回答を求めた。得点が高い程夫婦関係における満足が高いことを示す。先行研究によると、Cronbachの α 係数は0.927で本研究では0.926であった。

(3) 労働要因

父親の職業、労働時間

6. 分析方法

データの集計・分析には統計解析ソフトSPSSVer15.0を用いた。基本統計量の算出の他、因子分析、Spearmanの順位相関係数、重回帰分析等によって検討した。有意水準は5%とした。

7. 倫理的配慮

研究の趣旨と方法を学校長、PTA会長、子ども会会長に説明し、同意が得られた上で調査を行った。父親には研究への協力は自由意思であり拒否しても不利益はないこと、プライバシーは保護されること、結果は学会等で公表することなどを説明した依頼文を質問紙に添付し、同意する場合に質問紙に回答し郵送するとした。配布するにあたって、研究の協力が自由意思であることを配布者に理解してもらい強制力が働かないようにした。本研究は、研究計画書の段階で佐賀大学医学部倫理審査委員会の承認を得られた後に実施した (承認受付番号21-22)。

IV. 結 果

1. 父親の特性 (表1)

父親の平均年齢は、42.9歳 (SD=5.38) であった。職業は会社員が最も多く156名 (62.2%) で全体の半数以上を占めていた。1日の労働時間は500～600分 (8.3～10時間) が95名で最も多く、500～800分 (8.3～13.3時間) が全体の80%以上を占めている。配偶者については、有245名 (98%)・無6名 (2%) で、配偶者の職業を就労の有無で見ると、有182名 (72.5%)・無63名 (25.1%) であった。子どもの数については平均2.3名 (SD=0.75) であった。子どもの性別については、女140名 (55.8%)・男111名 (44.2%) であった。配偶者及び子ども以外の同居家族の有無については、同居有63名 (25.0%)・同居無188名 (75.0%) であった。

表1 父親の特性 (n = 251)

項 目	平均	標準偏差 SD	幅 range	人数	%
年齢	42.9	5.38	28-58	251	
年齢層				1	0.4
20代				74	29.6
30代				146	58.0
40代				30	12.0
50代					
職業					
公務員				34	13.5
会社員				156	62.2
自営業				49	19.5
その他				10	3.98
無回答				2	0.8
1日の労働時間 分(時間)	626.4	108.5	390-1020		
390～500分 (6.5～8.3)				11	4.4
500～600分 (8.3～10)				95	37.9
600～700分 (10～11.6)				73	29.2
700～800分 (11.6～13.3)				46	18.4
800～900分 (13.3～15)				14	5.6
900～1000分 (15～16.6)				4	1.6
1000分以上 (16.6以上)				1	0.4
無回答				7	2.8
学歴					
中学校				12	4.8
高等学校				120	47.8
専門、専修学校				27	10.8
短期大学				8	3.2
大学				78	31.1
大学院				6	2.4
配偶者					
有				245	97.6
無				6	2.4
配偶者の年齢	40.7	4.3	31-57	245	
配偶者の就労					
有				182	82.5
無				63	25.1
子どもの人数	2.3	0.75	1-5		
子どもの性別					
女				140	55.8
男				111	44.2
子どもの学年					
4年生				74	29.5
5年生				91	36.3
6年生				86	34.3
子どもの出生順位					
第1子				130	51.8
第2子				86	34.3
第3子				31	12.4
それ以外				4	1.5
同居家族(配偶者及び子ども以外)					
有				63	25.1
無				188	74.9

表2 父親の子どもへの養育の行動と意識 (n = 251)

関わり行動平均点	SD	関わり意識平均点	SD
4.521	0.634	5.003	0.682
rs = 0.687**			

Spearmanの順位相関係数 **p < 0.01

2. 父親の子どもへの養育の行動と意識

父親の子どもへの養育は、関わり行動平均点は4.521、関わり意識平均点は5.003であり、行動点より意識点の方が高く、行動と意識は有意な相関であった(rs = 0.687, p < 0.01) (表2)。

父親の子どもに対する養育に関わり行動・意識の項目で因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。因子負荷量0.4以下であった項目は順次削除した。行動の第1因子は「子どもに社会の規範を守らせるなどの管理／成熟への要求行動」とし、5項目抽出された。第2因子は「子どもが失敗したときに慰めるなどの会話／表現行動」とし、6項目抽出された。先行研究でのCronbachのα係数は0.784, 0.835で本研究においては0.838, 0.771であり内的整合性、信頼性は確認できた(表3)。意識の第1因子は「家族と団らんの時を持ちたいなどの会話／表現意識」とし、5項目抽出された。第2因子は「子どもに礼儀作法を教えたいなどの管理／成熟への要求意識」とし、3項目抽出された。先行研究でのCronbachのα係数は0.845, 0.771で本研究では0.881, 0.883であり、高い内的整合性、信頼性が確認できた(表4)。各因子軸間には相関しており、行動の高いものは意識も高く、行動の低いものは意識も低いことが予想された(表5)。

3. 父親の子どもへの養育の行動と意識に影響を与える要因(表6)

1) 個人要因について

父親の年齢・学歴においては、行動・意識に相関はなく、影響を与えていなかった。性役割観については、「会話／表現行動(rs = 0.151, p < 0.05)、会話／表現意識(rs = 0.219, p < 0.01)、管理／成熟への要求意識(rs = 0.175, p < 0.01)」で相関が認められた。親役割受容感について、肯定的の平均値は3.6(SD = 0.64)、否定的の平均値は2.2(SD = 0.58)であり、得点の平均値から見ると本研究の父親は、親役割を肯定的に受容している傾向である。肯定的親役割受容感とは「会話／表現行動(rs = 0.316, p < 0.01)、管理／成熟への要求行動(rs = 0.152, p < 0.05)、会話／表現意識(rs = 0.352, p <

表3 父親の養育の行動 因子分析結果

質 問 項 目	管理／成熟への 要求行動	会話／表現行動	α 係数
子どもに社会の規範(道徳観・お金の価値等)を守らせる	0.862	-0.009	0.838
挨拶などの基本的生活習慣を守らせる	0.816	-0.061	
家庭でのルール(家事の役割分担)を守らせる	0.725	0.003	
子どもが悪いことをした時、注意したり、厳しく叱る	0.689	-0.087	
家庭でのルール(帰宅時間)を守らせる	0.480	0.214	
子どもが失敗した時、慰める	-0.083	0.653	0.771
子どもと意見が異なった時、子どもの意見に耳を傾ける	-0.078	0.635	
子どもの悩みの相談にのる	0.612	0.612	
日常娯楽(テレビのドラマ・アニメ・映画・タレント・スポーツ等)に関する話題で話す	0.601	0.601	
子どもを一人の人間として対等扱う	0.537	0.537	
子どもと日常の社会現象(ニュース・事件・国際情勢等)に関する話題で話す	0.524	0.524	
因子寄与	3.358	2.986	
因子寄与率	34.63	10.06	

主因子法, プロマックス回転

表4 父親の養育の意識 因子分析結果

質 問 項 目	会話／表現意識	管理／成熟への 要求意識	α 係数
家族と団らんのおきを持ちたい	0.874	-0.017	0.881
子どもに話しかけたい	0.818	0.007	
買い物, 食事, 散歩などに出かける機会を持ちたい	0.806	0.00	
子どもの興味, 関心を知りたい	0.65	0.178	
子どもが困っていたら助けてあげたい	0.532	0.12	
子どもに礼儀作法(目上の人へのあいさつなど)を教えたい	-0.048	0.971	0.883
子どもに社会の規範(道徳観・お金の価値など)を教えたい	0.051	0.790	
しつけについては毅然とした態度で接したい	0.086	0.729	
因子寄与	4.197	3.891	
因子寄与率	52.2	8.08	

主因子法, プロマックス回転

表5 父親の子どもへの養育の行動と意識 因子軸間の相関

	行 動		意 識	
	管理／成熟への要求行動	会話／表現行動	会話／表現意識	管理／成熟への要求意識
管理／成熟への要求行動				
会話／表現行動	0.522**			
会話／表現意識	0.521**	0.561**		
管理／成熟への要求意識	0.655**	0.453**	0.614**	

Spearmanの順位相関係数 **p<0.01

表6 父親の養育の行動と意識因子に影響する要因の相関

要 因	行 動		意 識	
	会話／表現行動	管理／成熟への要求行動	会話／表現意識	管理／成熟への要求意識
性役割観	0.151*	0.061	0.219**	0.175**
肯定的親役割受容感	0.316**	0.152*	0.352**	0.295**
否定的親役割受容感	-0.222**	-0.150**	-0.186**	-0.121
夫婦関係満足	0.270**	0.233**	0.342**	0.339**

Spearmanの順位相関係数 **p<0.01

0.01), 管理／成熟への要求意識 ($rs = 0.295, p < 0.01$)」と相関が認められた。否定的親役割受容感は、「会話／表現行動 ($rs = -0.222, p < 0.01$)」, 管理／成熟への要求行動 ($rs = -0.150, p < 0.05$)」, 会話／表現意識 ($rs = -0.186, p < 0.01$)」と負の相関がみられた。親役割を肯定的に受容している父親ほど、子どもに関わる行動・意識が高く、親役割を否定的に受容している父親ほど、会話／表現行動・意識が低いといえる。性役割観の得点と配偶者の就労の有無を比較すると、就労有群の方が就労無群に比べて性役割観が有意に高かった ($p < 0.05$) (表7)。この結果から平等主義的な性役割観を持つ父親ほど、配偶者は就労有である。

2) 家族要因について

配偶者の年齢・就労状況、子どもの人数・学年・性別・出生順位、配偶者及び子ども以外の同居家族の有無において、行動・意識に有意差は見られず影響を与えていなかった。

夫婦関係満足は、「会話／表現行動 ($rs = 0.270, p < 0.01$)」, 管理／成熟への要求行動 ($rs = 0.233, p < 0.01$)」, 会話／表現意識 ($rs = 0.342, p < 0.01$)」, 管理／成熟への要求意識 ($rs = 0.339, p < 0.01$)」と相関がみられた。これより、夫婦関係に満足している父親ほど子どもへ関わる行動・意識が高い。

3) 労働要因について

父親の職業、労働時間(分)ともに、行動・意識との相関は見られず、労働要因は父親の養育の行動と意識に影響を与えていなかった。

表7 性役割観と配偶者の就労の有無の関連 (n = 245)

	就労有 (n=182)		就労無 (n=63)		有意確率
	平均	SD	平均	SD	
性役割観	50.8	8.8	47.6	7.4	0.017*

Mann-WhitneyのU検定 * $p < 0.05$

4) 子どもに対する父親の養育の行動と意識に影響を与える要因の影響度(表8)

父親の養育の行動と意識に影響を与える要因の影響度を明らかにするために、相関が認められた個人要因、家族要因の変数を独立変数として重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。結果は標準偏回帰係数の大きさを比較したところ、行動に「夫婦関係満足」「肯定的親役割受容感」の順に影響があり、意識に「夫婦関係満足」「肯定的親役割受容感」「性役割観」の順に影響があることが明らかとなった。

V. 考 察

1. 学童期後期の子どもに対する父親の養育の行動と意識

思春期は、子どもから大人への移行期である。これまでの親を中心とした様々な人々と自分自身を同一化し、その人たちの多様な特性を取り込み、自分の物の見方や行動様式を身につけていた時期から、自分自身の内面に目を向けるようになる(舟島, 2013, pp.147-148)と言われている。本研究で取り扱う前思春期段階の子どもも自我の確立に伴い、父親の関わりを自身の内面に取り込み、モデリングや補償を繰り返し将来の自身の父親イメージを形成していく重要な時期であると考ええる。

子どもに対する父親の養育の平均点は、行動点より意識点の方が高かった。これは、父親は子どもと関わりたい意識はあるが、実際には行動できていないことが推察できる。養育を行動と意識から因子分析した結果、行動においては、子どもに社会の規範を守らせる、基本的な生活習慣を守らせるなどの統制性の側面である「管理／成熟への要求行動」が第1因子となった。尾形(2007, p.99)は、父親と子どもの関わりは、子ども

表8 父親の養育の行動と意識に影響を与える要因の影響度 (n = 244)

要 因	行 動		意 識	
	β	有意確率	β	有意確率
夫婦関係満足	0.241	0.000***	0.286	0.000***
肯定的親役割受容感	0.219	0.001**	0.283	0.000***
性役割観			0.184	0.001**

調整済み R^2 : 0.130

R: 0.371 R^2 : 0.137

調整済み R^2 : 0.246

R: 0.506 R^2 : 0.256

重回帰分析 ステップワイズ法 ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

の社会性の発達に積極的な影響力を持つと述べている。本研究の学童期後期の子どもを持つ父親は、社会性を促す養育行動を自身の役割として、関わっていることが明らかとなった。意識においては、家族と団らんの時を持ちたいや話しかけたいなどの「会話／表現意識」が第1因子となった。意識としてこれが確認できたことは応答性の側面であるコミュニケーションや共働作的な関わりが少ない、あるいは持てていないことが予想された。

Baumrind (1991, pp.64-65) による「権威的態度」の親は、自主性と成長を積極的に励まし子どもの成長をうまく促すことができると述べている。すなわち、「管理／成熟への要求行動」と「会話／表現行動」のバランスの取れた養育行動が必要である。今後、子どもが成長していく過程で、父親の統制的な養育だけでは権威主義的でうまく関われないことが予想され、「会話／表現行動」のとれる関わりが持てるような促しが重要であろう。父親は学童期後期という発達段階にある子どもに対して、一人の個人としての成長を促し社会性を発達させる養育行動をとっていることが明らかとなった。

2. 養育の行動と意識に影響する要因

個人要因の「性役割観」「親役割受容感」は父親の子どもへの養育に影響していることが明らかになった。「性役割観」は「会話／表現行動・意識」「管理／成熟への要求意識」と関連していた。平等主義的な性役割観を持つことは子どもへ関わる意識を高め、特に応答性の関わりを促すと考えられる。また、父親の性役割観を配偶者の就労の有無で比較した結果、配偶者が就労しているほど平等主義的であった。幼児の親を対象とした研究(柏木・若松, 1994, p.82)では、父親の育児参加の度合いは夫自身の性役割観をベースにしており、配偶者の就労の有無が父親の育児参加を大きくするとしている。本研究の学童期後期の父親も同様の結果であり、配偶者が就労していることで子どもへの関わりを必然とし、柔軟な性役割観となっているのではないだろうか。対象の「親役割受容感」は、肯定的が否定的に比べ高く、親としての役割を肯定的に受容している傾向であった。肯定的・否定的共に、行動の2因子、意識においては「会話／表現意識」との関連が見られ、否定的親役割受容感を負の相関であった。これより親役割に対して、「会話／表現行動・意識」との関連が強く見られ、親役割を肯定的に受容することは、共働作

的な関わりを促すと考えられる。思春期の親子関係において、親が家庭における自身の役割を受容することは子どもに対する望ましい行動につながるということが明らかにされている(山本・佐藤・塩飽, 2008, p.354)。本研究においても同様に養育行動に関連しており、すなわち関わる行動を促している。「性役割観」「親役割受容感」は、父親自身が役割として意識し行動するものであり、子どもへ関わる中で変化させていると考えられる。子どもの成長に伴い、家庭の中で父親自身がどう行動すべきかを考えながら、平等的・肯定的に変化、成長しているといえる。

労働要因「労働時間」は養育の行動と意識に影響していなかった。乳幼児を持つ父親を対象とした福丸(2003, p.58)の研究では、父親の育児参加と父親の労働時間が関連していることを明らかにしている。しかし、本研究では労働時間との関連は確認できなかった。これは父親の子どもへの養育行動が、社会規範・基本的生活習慣を守らせるなどの行動をとっており、学童期後期の子どもは話をすれば理解できる年齢であり、時間的な量を必要とするものでなく質的な関わりであり労働時間に影響しなかったと考える。

家族要因として捉えた子どもの性差は父親の養育に影響していなかった。加藤(1992, p.123)は3歳児の子どもを持つ父親の関わりに影響を及ぼす要因について、男性意識の高い父親は低い父親に比べて男子に多く接近していることを明らかにしている。本研究の結果では、父親の子どもへの養育の行動と意識に性差は関連せず関係なく関わっている。子どもの性差に対する父親の養育行動の違いは、このように様々な知見が得られているため、検出方法を含めて今後の課題としたい。

養育の行動と意識に最も影響していたのは家族要因の「夫婦関係満足」であった。子どもに社会規範を守らせる、子どもを慰める、子どもに礼儀作法を教えた、家族と団らんの時を持ちたいという行動と意識は、父親が夫婦関係に満足していることで子どもへ関わる事が出来ると考えられた。中学生の子どもを持つ父親において、平田(2003, p.42)は妻と連携している父親ほど子どもと多く関わっているとしている。また、幼児期の子どもを持つ父親において、夫婦関係満足は子育てへの関心という間接的な育児関与との関連(森下, 2006, p.190)が明らかにされており、本研究の対象である学童期後期の子どもを持つ父親においても影響が確認された。子どもに対する父親の養育の行動と意識に夫婦関係満足が最も影響した事について、学童期

後期という発達段階の子どもに対して父親が統制性の役割を担うためには、妻との家庭における役割調整が必要となり、妻と連携をとり信頼し合えることが重要となるのではないだろうか。父親の養育は、父親自身の持つ価値観、意識だけでなく夫婦関係といった家族要因の影響を受けていることが明らかとなった。これより、家族を含めた支援対策を立てる必要性が考えられた。以上、学童期後期の子どもを持つ父親は、「管理／成熟への要求行動」を自身の役割とした養育行動をとっており、影響要因として、「夫婦関係満足」「肯定的親役割受容感」「性役割観」が関連していた。この結果から、父親の子どもへの養育には、親役割を肯定的に受容し平等的性役割観を意識として持ち、夫婦関係に満足していることで促されていることが明らかとなった。これを父親自身に伝えていくことはもちろんだが、妻にも理解してもらうことが父親の子どもへの関わりを促すためには必要である。父親の役割が不明瞭な現代社会においては極めて重要な意味を持つことであると考える。

VI. 研究の限界と今後の課題

今回の研究では、限定した地域において学童期後期の子どもに対する父親の養育について明らかにできたことは有益である。しかし、複数の対象の子どもを有する父親、母子家庭の子どもにも質問紙を配布しており回収率が低く、子育てに関心のある父親からの回収が多くなった可能性がある。そのため、この結果を一般化するには限界があり、今後は地域特性を踏まえて、縦断的研究へと発展させたい。次に、父親の養育の行動と意識に影響する個人要因・家族要因・労働要因の関係について、モデルが十分な説明力を持っているとは言えない。今後は家族をシステムとして捉え、母親あるいは子どもに対しても調査を行い、父親の養育に影響する要因を検討することも必要であるだろう。

VII. 結 語

1. 学童期後期の子どもに対する父親の養育は、行動に「管理／成熟への要求行動の5項目」「会話／表現行動の6項目」の2因子、意識に「会話／表現意識の5項目」「管理／成熟への要求意識の3項目」の2因子が抽出された。
2. 養育に影響する要因は、行動に「夫婦関係満足」

「肯定的親役割受容感」、意識に「夫婦関係満足」「肯定的親役割受容感」「性役割観」であった。

3. 父親の養育の行動と意識に最も影響する要因は、「夫婦関係満足」でありこれより家族を含めた支援の必要性が示唆された。

謝 辞

本研究にご協力いただきました小学校、子ども会のお父様方、各小学校の校長、担任の先生、PTA会長、子ども会会長の皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は、平成22年度佐賀大学大学院の修士論文を加筆修正したものであり、その要旨を第26回日本助産学会学術集会において発表した。

参考文献

- Baumrind, D. (1967). Child Care Practices Antecedent Three Patterns of Preschool Behavior. *Genetic Psychology Monographs*, 75, 43-88.
- Baumrind, D. (1991). Parenting Style & Adolescent Outcomes. *Journal of Early Adolescence*, 11(1), 56-95.
- Belsky, J. (1984). The Determinants of Parenting: A Process Model. *Child Development*, 55, 83-96.
- 福丸由佳 (2003). 幼児を持つ父母における仕事と家庭の多重役割. pp.31-64, 東京：風間書房.
- 舟島なをみ (2013). 看護のための人間発達学 (第4版). pp.140-263, 東京：医学書院.
- 平田裕美 (2000). 父親の青年への関わり行動尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討. 人間文化論叢, 3巻, 293-301.
- 平田裕美 (2003). 青年期の子どもに対する父親の関わり一分類と特性. 家族心理学研究, 17(1), 35-54.
- 蛭田由美, 斉藤益子, 木村好秀 (1999). 父性意識の形成発達に関する研究—新生児の父親と4歳児の父親の比較—. 母性衛生, 40(4), 432-439.
- 石川周子 (2003). 父親の養育行動と思春期の子どもの精神的健康. 家族社会学研究, 15(2), 65-76.
- 柏木恵子, 若松素子 (1994). 「親となること」による人格発達—生涯発達視点から親を研究する試み—. 発達心理学研究, 5(1), 72-83.
- 加藤邦子 (1992). 父親の性役割意識と父子かかわりの関連について. 家庭教育研究所紀要, 14, 117-223.
- 川崎佳代子, 神田晃, 川口毅 (2001). 父性イメージからみた父性発達段階の特性に関する実証的研究. *Health Sciences*, 17(2), 66-76.

- 森下葉子(2006). 父親になることによる発達とそれに関わる要因. 発達心理学研究, 17(2), 182-192.
- 諸井克英(1997). 子どもの眼から見た家庭内労働の分担の公平性—女子青年の場合. 家族心理学研究, 11(2), 69-81.
- 西村良二(1998). 思春期後期女性における理想的父親像についての検討. 広島医学, 51(6), 699-703.
- 尾形和男(2007). 家族システムにおける父親の役割に関する研究—幼児, 児童とその家族を対象として. pp.59-102, 東京: 風間書房.
- 小野寺敦子(1984). 娘からみた父親の魅力. The Japanese Journal of Psychology, 55(5), 289-295.
- 小野寺敦子, 青木紀久代, 小山真弓(1998). 父親になる意識の形成過程. 発達心理学研究, 9(2), 121-130.
- 大日向雅美(1989). 母性の研究. pp.135-169, 東京: 川島書店.
- 佐々木くみ子, 植田彩, 鈴木康江, 前田隆子, 片山理恵(2004). 親となる意識の構造とその影響要因に関する調査研究. 米子雑誌, 55, 142-150.
- 鈴木淳子(1999). 高学歴夫婦における性役割態度の関係—就労とのかかわりに関する社会心理学的考察. 理論と方法, 14(1), 35-50.
- 徳田完二(1987). 青年期における自己評価と両親の養育態度. The Japanese Journal of Psychology, 58(1), 8-13.
- 山本三奈, 佐藤幸子, 塩飽仁(2008). 両親の役割受容, 親役割行動と思春期にある子どもの精神的健康との関連. 小児保健研究, 67(2), 349-356.